

道元禅師の授記思想

池田魯参

- 一 『法華經』の授記思想
- 二 『正法眼藏授記』の典拠
- 三 道元禅師の授記思想

一

「授記」の原義は、仏が弟子に、「汝は、未来の何時に、これという名号の仏となるであろう」というような形で、成仏・作仏の予言をし、証明を与えることである。

「授記」は、また「受記」「受決」「受荊」などとも記す。「授」は与える意、「受」は得る意、「記」は事柄を記す意、「決」は決定の意、「荊」は了別の意である、とは『法華文句』（大正藏三四卷九七頁下）の説である。

このような物語を契機として、その後、種々の授記話が成立するわけであるが、その意図するところは、仏が一切衆生を成仏させようという本願の表現である。このように過去仏から授記される本生話の一端と、現在仏から授記される未来記（懸記）話などが成立し、これらの授記話を用いる大乗經典が現われるのであるが、その中でも『法華經』の授記思想は、最も顕著なものとされる。

授記の原型は、釈尊が前生で、燃灯仏（鎌光仏）から授記された物語があり有名である。燃灯仏の時に、釈迦菩薩孺童は、王家の女、瞿夷から、五百の金貨をはらって五呎の青蓮

そこで『法華經』の中で「授記」を説く個所を全て列挙し、その内容を概説してみると次下のようになる。

先ず『序品』第一では、四衆に開達された仏が、諸の菩薩のために、「大乗經の無量義・菩薩を教える法・仏に護念せらるるもの」と名づける経を説き已って、結跏趺坐し、無量義處三昧に入り、此土に六瑞、他土に六瑞を現じる。この神変の相を見て、弥勒菩薩は、文殊菩薩に、これは何のような因縁かと問う。その重頌に、次のように出る。

(1) 仏子文殊よ、願わくは衆の疑を決したまえ。四衆は欣仰して仁及びわれを瞻る。世尊は何が故に、この光明を放ちたもうやと。仏子よ、時に答えて、疑を決して喜ばしめたまえ。何の饒益する所ありて、この光明を演べたもうや。仏は道場に坐して、得たまえる所の妙法、為めてこれを説かんと欲するや。為めて當に授記したもうべきや。諸の仏土の、衆宝にて厳淨せらるるを示すと、及び諸仏を見たてまつるとは、これ小縁に非ず。文殊よ、當に知るべし。四衆・竜神は、仁者を瞻察す。ために何等を説かんとするやと（大正藏九卷三頁下）。

この弥勒の問を承けて、文殊は「善男子等よ、われの、惟い付る如くならば、今、仏世尊は大法を説き、大法の雨を雨し、大法の螺を吹き、大法の鼓を擊ち、大法の義を演べんと欲するならん」と語り、以下に過去世の因縁と符合するとして、日月燈明如來と八王子の因縁談を語る。その中で次のよう示される。

(2) 時に菩薩あり、名を徳藏といふ。日月燈明仏は、即ちそれに記を授け、諸の比丘に告げたもう『この徳藏は、次に當に仏を作るべし。号を淨身多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀といわん』と。仏は授記し已って、便ち中夜において無余涅槃に入りたまえり。仏の滅度の後に、妙光菩薩は妙法蓮華經を持ち、八十小劫を満たして人のために演説す。日月燈明仏の八子は、皆妙光を師とし、妙光は教化して、それをして阿耨多羅三藐三菩提に堅固ならしむ。この諸の王子は、無量百千万億の仏を供養し已って、皆、仏道を成す。その最後に成仏する者の名を燃燈という（四頁中）。

「序品」では、この後にこの時の妙光菩薩が文殊であり、妙光の八百人の弟子の中にいた求名が弥勒であると打ち開ける。

文殊が宣べる重頌の中には、次のように出る。

(3) 諸仏を供養し已って、隨順して大道を行じ、相繼いで成仏することを得、転次して授記す。最後の天中天をば、号けて燃燈仏といい、諸仙の導師として、無量の衆を度脱したもう（五頁中）。次に、「方便品」第二では、いわゆる法説周が示され、一乘真実、三乘方便の義を説きおわった仏が最後を結ぶ長文の重頌で、次のように説く。

(4) 仏子にして、心淨く、柔軟に、また利根にして、無量の諸の仏の所にて、深妙の道を行するものあり。この諸の仏子のためにこの大乗經を説き、われ、かくの如き人は、來世に仏道を成せん、と記するなり（八頁上）。

「譬喻品」第三では、その冒頭に、舍利弗の領解として示される。

(5) その時、舍利弗は踊躍し、歎喜して、即ち起ちて合掌し、尊顔を瞻仰して、仏に曰して言わく「今、世尊よりこの法音を聞きて、心に踊躍を懷き、未曾有なることを得たり。所以はいかん。われ、昔、仏よりかくの如き法を聞きしき、諸の菩薩、記あを受けて、仏と作りしを見たれども、しかも、われ等は、この事に予からざりしをもって、甚だ自ら如來の無量の知見を失えることを感傷せり（一〇頁下）。

この後、舍利弗は仏から作仏の記を与えられ、華光如来と号し、離垢という国の、大宝莊嚴という劫を化すことが示される。

(6) 舍利弗よ。華光仏の寿は、十二小劫ならん。王子となりて、未だ仏と作らざりし時をば除く。その國の人民の寿は、八小劫ならん。華光如來は、十二小劫を過ぎて、堅滿菩薩に、阿耨多羅三藐

三菩提の記を授けて、諸の比丘に告げん。『この堅滿菩薩は、次に當に仏と作るべし。号を華足安行多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰わん。その仏の國土も、亦、また、かくの如くならん』と（一一頁下）。

(7) 一等の大衆は、舍利弗が仏前において、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを見て、心、大いに歎喜し、踊躍すること無量なり。各各、身に著たる所の上衣を脱ぎて、もって仏に供養す（一二頁上）。

これを承けて諸の天子が述べる重頌に次のように出る。

(8) 大智ある舍利弗は、今、尊の記を受くるを得たり。われ等も、亦、かくの如く必ず當に仏と作りて、一切世間において、最尊にして上あること無きことを得べし（一二頁上）。

この偈文の後で舍利弗は譬喻説周を勧請する。

(9) その時、舍利弗は仏に白して言わく「世尊よ、われは、今また、疑悔無く、親しく仏前において、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くるを得たり。……しかるに今、世尊の前ににおいて、未だ聞かざる所を聞きて、皆、疑惑に墮せり。善い哉。世尊よ。願わくは四衆のために、その因縁を説き、疑悔を離れしめたまえ。」

（一二頁中）。

この後、仏は火宅三車の譬喻をもちいて法説の義を敷演するのである。

「信解品」第四では、譬喻説周で、須菩提と摩訶迦旃延と摩訶迦葉と摩訶目犍連の四大弟子が領解する段に次のように記される。

(10) その時、慧命、須菩提と摩訶迦旃延と摩訶迦葉と摩訶目犍連とは、仏より聞ける所の未曾有の法と、世尊の、舍利弗に阿耨多羅三藐三菩提の記を受けたもうとに、希有の心を発し、歎喜し、踊躍して、即ち座より起ちて衣服を整え、偏えに右の肩を袒し、右の膝を地に着け、一心に合掌し、躬を曲げて恭敬し、尊顔を瞻仰して、仏に白して言わく「われ等は、僧の首に居りて、年は並びに朽ち邁いたり。自ら已に涅槃を得て、堪任する所なしと謂いて、また、進んで阿耨多羅三藐三菩提を求めざりしなり。世尊は、往昔に、説法して既に久し。われは、時に座に在りて、身

体、疲憊して、但、空、無相、無作のみを念じ、菩薩の法たる、神通に遊戯し、仏国土を浄め、衆生を成就することにおいて、心は、喜樂せざりしなり。所以はいかん。世尊は、われ等をして、心三界を出でて、涅槃の証を得せしめたまえばなり。また、今、われ等は年、已に朽ち邁いて、仏の、教化したもう菩薩の阿耨多羅三藐三菩提においても、一念の好樂の心を生ぜざるに、われ等は、今、仏前において、声聞に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたもうを聞きて、心、甚だ歎喜し、未曾有なることを得たり。謂わざりき、今において、忽念として希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら、大善利を獲、無量の珍宝は求めざるに自ら得たることを慶幸するなり（一六頁中）。

この後に長者窮子の喻で譬喻説周の領解が示されるのであるが、この義を摩訶迦葉が重ねて偈説する中に次のように記される。

④この時、諸仏は、即ちその記を受けたもう。『汝は来世において、當に仏と作ることを得べし』と。一切の諸仏の、秘藏の法をば、但、菩薩のためにのみ、その実事を演べて、しかも、わがためには、この眞実を説かざりしなり。かの窮子の、その父に近づくことを得て、諸の物を知ると雖も、心に怖い取らざるが如く、われ等は、仏法の宝藏を説くと雖も、自ら志願なきこと、亦、また、かくの如し（一八頁中）。

「薬草喻品」第五では、摩訶迦葉及び諸の大弟子に告げて、仏がその領解の正当性を述成するのであるが、「授記」の用語はみえない。

「授記品」第六では、四大弟子に授記が与えられる。摩訶迦葉は、未來世に光明如來となり、光德という國の大莊嚴といふ劫を化し、須菩薩は、名相如來と号する仏になり、宝生國で、有寶劫を化し、大迦旃延は、闍浮那提金光如來と号し、大目犍連は、多摩羅跋栴檀香如來といい、意樂國で、喜満劫を化すと示される。摩訶迦葉に授記が与えられた後に、大目犍連と須菩提と摩訶迦旃延が同声で偈で説いた中に次のように出る。

⑫大雄猛なる世尊よ。諸の釈の法王よ。われ等を哀愍したもうが故に、仏の音声を賜え。若しわが深心を知らしめして、ために、記を受けられなば、甘露をもつて灑に、熱を除いて清涼を得るが如くならん。飢えたる國より來りて、忽ちに大王の餚に遇えるに、心、猶、疑懼を懷いて、未だ敢えて即使ちには食せず、若しまた王の教を得れば、然る後、乃ち敢えて食するが如く、われ等も、亦、かくの如し。毎に小乘の過を惟いて、當に云何にして、仏の無上の慧を得べきかを知らず。仏の音声の、われ等は、仏と作らん、と言うを聞くと雖も、心に尚、憂懼を懷くこと、未だ敢えて便ち食せざるが如し。若し仏の授記を蒙らば、爾して乃ち快く安樂ならん。大雄猛なる世尊は、常に世間を安んぜんと欲す。願わくは、われ等に記を賜え。飢えしものの、教を須つて食するが如くならん。」（二一頁上）。

また大目犍連に与えた授記の重頌の最後に次のように出る。

(13) 我が諸の弟子にして、威徳を具足せるもの、その数五百なるに

も、皆、當に記を授くべし。『未來世において、咸く成仏するこ
とを得ん。我及び汝等の、宿世の因縁を、吾れ今、當に説くべ
し。汝等よ、善く聽け』(一二二頁上)。

「化城喻品」第七では、第三因縁説周が示され、三千塵点
劫の過去の大通智勝如来の因縁が、化城宝所の喻えで説かれ
る。

「五百弟子受記品」第八では、化城宝所の因縁を聞き富樓
那弥多羅尼子をはじめとする五百人の阿羅漢に授記が与えら
れる。

(14) その時、富樓那弥多羅尼子は、仏よりこの智慧の方便による宜
しきに隨う説法を聞き、また諸の大弟子に、阿耨多羅三藐三菩提
の記を授けたもうを聞き、また宿世の因縁の事を聞き、また諸仏
に大自在の神通のあることを聞きたてまつりて、未曾有なるこ
とをえ、心は淨く踊躍せり(二七頁中)。

この後に富樓那の領解と仏の述成があり、富樓那はこの土
において法明如来という仏になることが授記される。

(15) その時、千二百の阿羅漢にして心の自在なる者は、この念を作
す「われ等は、歡喜して未曾有なることを得たり。若し世尊の、
各に記を授け見ること、余の大弟子の如くなれば、亦、快からざ
らんや」と。仏は、これ等の心の念する所を知りて、摩訶迦葉に
告げたもう「この千二百の阿羅漢に、われは、今、當に現前に、
次第に、阿耨多羅三藐三菩提の記を与えるべし。(略)(二八

頁中)。

として、橋陳如は、普明如來と号する仏になり、優樓頻螺迦
葉・伽耶迦葉・那提迦葉・迦留陀夷・優陀夷・阿菟樓駄・離
婆多・劫賓那・薄拘羅・周陀・莎伽陀等の五百の阿羅漢は、

同ように普明という名の仏になると授記される。

(16) その五百の比丘は、次第に當に仏と作るべく、同じく号けて普
明といわん。転次に、すなわち記を授くべし(二八頁下)。

(17) その時、五百の阿羅漢は、仏の前において、記を受くることを
得おわりて、歡喜し踊躍して、即ち座より起ちて仏の前に到り、
頭面に足を礼し、過を悔いて、自ら責む(二九頁上)。

この後に、衣裏繫珠の喻で歡喜の心を表明する。

(18) 世尊よ、われは今、乃ち知れり、實にこれ菩薩にして、阿耨多
羅三藐三菩提の記を授かることを得たることを。この因縁をもつ
て、甚だ大いに歡喜し、未曾有なることを得たり(二九頁上)。
阿若憍陳如は重ねて此の義を偈を説いて宣べる。

(19) われ等は無上、安穩の授記の声を聞きたてまつり、未曾有なり
と歡喜して、無量智の仏を礼したてまつる(二九頁上)。

(20) われは今、仏より、授記と莊嚴の事と、及び転次に決を受けん
ことを聞きたてまつりて、身心は遍く歡喜せり」と(二九頁
中)。

「授學無學人記品」の冒頭に次のようにみえる。

(21) その時、阿難と羅睺羅は、すなわち、この念を作せり「われ等
は、毎に自ら思惟す、設し記を授けらるることを得ば、亦、快か

らざらんや」と。即ち座より起ちて、仏の前に到り、頭面に足を礼して、俱に仏に白して言わく「世尊よ、われ等も此において、亦、應に分有るべし。唯、如來のみ有して、われ等の帰する所なり。また、われ等は、これ一切世間の天・人・阿修羅に知識せらる所なり。阿難は常に侍者となりて法藏を護持し、羅睺羅はこれ仏の子なり。若し仏にして阿耨多羅三藐三菩提の記を受けられなば、わが願は既に満ち、衆の望も亦、足るならん」と（二九頁中）。

その時、学・無学の二千人の弟子は、同様に阿難と羅睺羅のごとく願つた。そこで、仏は阿難は山海慧自在通王如来となり、常立勝幡という國で、妙音遍滿という劫を化すであらうと授記を与える。

②その時、会の中の新發意の菩薩八千人は、咸く是の念を作せり「われ等は、尚、諸の大菩薩の、かくの如き記を得たることすら聞かざるに、何の因縁有りて、諸の声聞にして、かくの如きの決を得るや」と。

その時、世尊は諸の菩薩の心の念する所を知りたまひて、これに告げて曰う「諸の善男子よ。われと阿難とは等しく、空王仏の所において、同時に阿耨多羅三藐三菩提の心を発せり。阿難は常に多聞を樂い、われは常に勤めて精進せり。この故に、われは已に阿耨多羅三藐三菩提を成することを得たり。しかるに阿難は、わが法を護持し、また将来の諸仏の法藏をも護りて、諸の菩薩衆を教化し成就せしめん。その本願はかくの如し。故にこの記を獲たるなり」と。

阿難は、^{まのあた}面おもてり、仏の前において、自ら記を受けらるると、及び国土の莊嚴とを聞き、所願が具足せるをもって、心、大いに歡喜して未曾有なることを得たり（三〇頁上）。

統いて羅睺羅は、踏七寶華如來と号する仏となることが示され、学・無学の二千人も、同じ一号の宝相如來となることが示される。重頌の中に次のように出る。

②「この二千の声聞の、今、わが前において住せるものに、悉く皆、記を与え授けん。『未来に當に仏と成るべし。供養する所の諸仏は、上に説ける塵數の如くならん。その法藏を護持して、後に當に正覺を成すべし。各、十方の国において、悉く同じく一名号ならん。俱時に道場に坐して、もって無上慧を証り、皆、名づけて宝相とせん。國土と及び弟子と、正法と像法とは、悉く等しくして異り有ることなからん。咸く諸の神通をもって、十方の衆生を度い、名聞は普く周遍して、漸く涅槃に入るならん』と。」（三〇頁中）。

③その時、学・無学の二千人は、仏が記を受けたもうを聞きて、歎喜し、踊躍して、偈を説いて言わく「世尊は慧の燈明なり。われは記を受けらるる音を聞きたてまつりて、心、歎喜に充滿すること、甘露をもって灌がるが如し」と（三〇頁中）。

以上で迹門の三周説法における、三周説法と各領解・述成・授記の形式を踏える声聞を中心とした説を終る。

「法師品」第十以後では菩薩を中心に展開し、「法師品」冒頭では以上の授記の思想を承けて、次のように記される。

④その時、世尊は、藥王菩薩に因せて、八万の大士に告げたもう

「薬王よ、汝はこの大衆の中の無量の諸の天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦と、人と非人と、及び比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷と、声聞を求むる者、辟支仏を求むる者・仏道を求むる者とを見るや。かくの如き等の類にして、咸く仏前において、妙法蓮華の一偈一句を聞きて、乃至、一念も隨喜する者には、われは、皆、記を与え授く『當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし』と。「仏は薬王に告げたもう「又、如來の滅度の後に、若し人有りて、妙法蓮華經の、乃至一偈一句を聞きて、一念も隨喜する者には、われは、また阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く（三〇頁下）。

「見宝塔品」第十一では、仏前に七宝の塔が地から涌出し、空中に住在し、宝塔の中から大音声が聞こえる。仏は白毫から光を放ち、十方の諸仏が来集した後、宝塔の戸を開くと多宝如来が現われ、半座を分つて、釈迦牟尼仏は塔中に入つて結跏趺坐することが示される。虚空会の開演であるため、「授記」については闇説されていない。

次の「提婆達多品」第十二では、提婆達多に授記が与えられ、天王如来と号する仏となり、天道と名づける世界を化することが示される。次いで文殊師利の竜宮化道が説かれ、八歳の娑竭羅竜王の女が、忽然の間に変じて成仏することが説かれる。

(25) その時、娑婆世界の菩薩と声聞と天・竜の八部と人と非人とは、皆、遙かに彼の竜女の、成仏して普く時の会の人・天のため

に法を説くを見、心、大いに歎喜して悉く遙かに敬礼せり。無量の衆生は、法を聞いて解悟り、不退転を得、無量の衆生は、道の記を受くることを得たり。無垢世界は、六反に震動し、娑婆世界の三千の衆生は、不退の地に住し、三千の衆生は菩提心を発して、記を受くることを得たり。智積菩薩と及び舍利弗と一切の衆会とは、黙然として信受せり（三五頁下）。

「勸持品」第十三では、薬王菩薩他の二万の菩薩が「不惜身命」の誓の言を作し、続いて五百の阿羅漢、八千人の学・無学人が誓の言をなす一段に次のようにみえる。

(26) その時、衆中の五百の阿羅漢にして受記を得たる者は仏に白して言わく「世尊よ、我等も、亦、自ら誓願せん。異なる国土において広くこの経を説かん」と。また、学・無学の八千人の受記を得たる者あり、座より起ちて合掌し仏に向いて、この誓の言を作す「世尊よ、われ等も亦、當に他の國土において、広くこの経を説くべし、所以は何ん。この娑婆國の中の人は、弊惡多く、増上慢を懷き、功德淺薄にして、瞋濁・諂曲ありて、心、実ならざるが故なり」と（三六頁上）。

その時、姨母の摩訶波闍波提比丘尼を筆頭とする六千人の學・無学の比丘尼が、じっと仏の尊顔を瞻仰している。

(27) 時に、世尊は、橋曇弥に告げたもう「何が故に、憂いの色にて如來を見るや。汝が心に、^{ある}は、われ汝の名を説いて阿耨多羅三藐三菩提の記を授けず、と謂うことなしや。橋曇弥よ、われは、先に総じて一切の声聞に皆、已に記を授くと説けり。今、汝よ、記を知らんと欲せば、将来の世に、當に六万八千億の諸仏の

法の中において、大法師となるべし。及び六千の学・無学の比丘尼も俱に法師となるべし。汝はかくの如く、漸漸に菩薩の道を具して、當に仏と作ることを得、一切衆生喜見如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と号くべし。橋曇弥よ、この一切衆生喜見仏と、および六千の菩薩は、転次に記を授けて、阿耨多羅三藐三菩提を得せしめん」と（三六頁上）。

28 その時、羅睺羅の母、耶輸陀羅比丘尼は、この念を作せり「世尊は、記を授くる中において、独りわが名を説きたまわづ」と。佛は耶輸陀羅に告げたもう。「汝は、來世の百千万億の諸仏の法の中において、菩薩の行を修し、大法師となり、漸く仏道を具し、善き國の中において、當に仏と作ることを得、具足千万光相如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と号くべし。仏の寿は、無量の阿僧祇劫ならん」と（三六頁上）。

歎喜した摩訶波闍波提比丘尼と耶輸陀羅比丘尼は偈を説いて次のように言う。

29 「世尊は導師として、天・人を安穩ならしめたもう。われ等は記を聞き、心、安んじて具足せり」と（三六頁中）。

その時八十万億の那由他の菩薩は、如來の滅後に衆生にこの經を書写し、受持し、読誦し、その義を解説し、法の如くに修行し、正しく憶念させることを誓う。

「安樂行品」第十四では、文殊が後の惡世にこの經を説く時に何を心がけなければならないかを問う、仏はそれに対し

ていわゆる身・口・意・誓願の四安樂行を説く。そして、この經は轉輪聖王から醫中の明珠を授かるようなもので、如來の第一の説であり、諸の説の中において最も甚深であるから末後に賜い与うることを縷説する。重頃の中に次のようすに示す。

30 仏は、その心、深く仏道に入れり、と知しめして、即ちために最正覺を成せんことを授記して『汝、善男子よ、當に來世において、無量の智ある、仏の大道を得、國土は嚴淨にして、廣大なる、こと比なく、亦、四衆ありて、合掌して法を聽くべし、とのたもう』を見ん（三九頁中下）。

以上で、二十八品のうち前半の迹門十四品が終り、「從地涌出品」第十五からは後半の本門十四品が始まる。「涌出品」では、他土から來集した菩薩たちが、仏の滅後にこの經典を廣説することを言うと、仏はこれを制止して、この娑婆世界には六万の恒河の沙に等しい菩薩と眷属があつてこの經を説くから、他土の菩薩たちには用がないと答える。仏がこう説くやいなや、娑婆世界の三千大千の國土は大地が裂けて、その中から無量の菩薩たちが同時に涌出した。上首の上行・無辺行・淨行・安立行と名づける四大菩薩は、仏に問訊し、仏はこれを好みして應酬する。その時、他土から來た釈迦牟尼仏の分身の諸仏の侍者たちは、この不思議な情景をみて、それぞれ仏にこの因縁を問う。

(3) その時、諸の仏は、各、侍者に告げたもう「諸の善男子は、且らく須叟を待て。菩薩・摩訶薩あり、名を弥勒と曰う。釈迦牟尼仏の、『次いで後に仏と作るべし』と授記したもう所なり。已に此事を聞いたまつれるをもつて、仏は今、これに答えたまわん。汝等よ。自ら當に、これに因りて、聞くことを得べし」と(四一頁上)。

釈迦牟尼仏は、弥勒菩薩の間に答えて、これ等の地涌の菩薩たちは、久遠より来、教化して来たものたちである、と打ち開ける。これを聞いて弥勒をはじめ諸の菩薩は疑念を生じる。たかだか四十余年の少の時に、このように無量の菩薩を教化することができるのであろうか。それは譬えば、年の二十五の青年が、百歳の人をして「これはわが子である」といい、百歳の人が青年を指して「これはわが父であり、わたしたちを生育してくれた」というようなもので、信じ難いことである。どうかこの疑いを除いて欲しいと弥勒が問い合わせ、本門の正説を導き出す序分の役割を果たす。

「如來壽量品」第十六では、「涌出品」を承けて、如來の寿量がいかなるものであるかが明かされる。すなわち釈迦牟尼仏は五百千万億塵劫の久遠に成仏したのである。その中間で、釈迦牟尼仏は、燃燈仏であるなどと説いた。また少くして出家し、成道し、滅度するであろうと説いたが、眞実は、成仏してからの方、久遠であり、寿命は無量で、常に住して滅することはない。菩薩の道を行じて成じた寿命は未だ尽

きることなく、上の数にも倍せるものである。仏は「常に靈鷲山及び余の諸の住処に在る」のである。それなのに八十歳の涅槃を示すのは、憍恣や厭怠を懷いて遭い難きものに出会つていることを知らず恭敬の心を生ずることができない衆生のために、方便を用いてそう説いたのに外ならない。それは譬えば良医の方便のようなものであると示される。

「分別功德品」第十七では、前半で本門の法身菩薩の授記が示される。本門の授記は、仏の久遠実成を聞いて、弟子も久遠を体解して、実際に未來成仏の段階を昇進して行くのである。その前半の部分を示すと次のようである。

その時、大會は仏の「寿命の劫数の長遠なることはの如し」と説きたもうを聞きて、無量無邊の阿僧祇の衆生は大饒益を得たり。時に世尊は弥勒菩薩・摩訶薩に告げたもう「阿逸多よ、われ是の如來の寿命の長遠なることを説ける時、六百八十万億那由他的恒河沙の衆生は、無生法忍を得たり」。また千倍の菩薩・摩訶薩ありて、聞持陀羅尼門を得たり〔一〕。また一世界の微塵数の菩薩・摩訶薩ありて、樂説無礙弁才を得たり〔二〕。また一世界の微塵数の菩薩・摩訶薩ありて、百千万億無量の旋陀羅尼を得たり〔三〕。また三千大千世界の微塵数の菩薩・摩訶薩ありて、能く不退の法輪を轉ぜり〔四〕。また二千中國土の微塵数の菩薩・摩訶薩ありて、能く清淨の法輪を轉ぜり〔五〕。また小千国土の微塵数の菩薩・摩訶薩ありて、八生に当に阿耨多羅三藐三菩提を得べし〔六〕。また四の四天下の微塵数の菩薩・摩訶薩ありて、四生に当に阿耨多羅三藐三菩提

を得べし。また三の四天下の微塵数の菩薩・摩訶薩ありて、三生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。また二の四天下の微塵数の菩薩・摩訶薩ありて、二生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。また一の四天下の微塵数の菩薩・摩訶薩ありて、一生に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。また八世界の微塵数の衆生ありて、皆、阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。

この後、弥勒の讚歎の偈で、本門の正宗分が終る。この品の後半から「不輕菩薩品」に至る三品半では、弘經の功德を示して流通を勧め、神力品以下の八品では付嘱によつて流通を勧める。

流通分に相当する諸品の中で「常不輕菩薩品」第二十は、授記思想を宣揚した品として著名である。得大勢菩薩を相手にして仏は次のような話をする。過去世の威音王如來が大成という國に離衰と名づける劫において教化し、その後も二万億の同一の号の仏が出られたが、その最初の威音王如來が滅度した後、像法の中において増上慢の比丘が勢力をもつていた時に、常不輕という名の菩薩の比丘があり、この菩薩比丘は、専ら經典を讀誦するのではなく、但、礼拝を行ずるだけであった。そして常に「われ敢えて汝等を輕しめず。汝等は皆當に仏と作るべきが故なり」といったといふ。

(3) 四衆の中に、瞋恚を生じ心淨からざる者ありて、惡口し罵詈して言ふ『この無智の比丘は、何れの所より來たるや。自ら、われ汝を輕しめず、と書いて、われ等がために、當に仏と作ることを

得べし、と授記す。われ等は、かくの如き虚妄の授記を用いざるなり』と。かくの如く常に罵詈せらるるも、瞋恚を生さずして、常にこの言を作せり『汝は當に仏と作るべし』と。この語を説く時、衆人、或いは杖木・瓦石を以つてこれを打擲けば、避け走り、遠くに住りて、猶、高声に唱えて言わく『われ敢えて汝等を輕しめず、汝等は皆當に仏と作るべし』と。それ、常にこの語を作すを以つての故に、増上慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は、これを号けて常不輕となせるなり(五〇頁下)。

この比丘は、臨命終の時に、虛空において威音王仏が説かれた法華經を受持して、六根の清淨を得て、廣く人のためにこの經を説き、増上慢の四衆はその説を聞いて心から信伏したといふ。さらに日月灯明仏の法の中、雲自在灯王の法の中でこの經典を説き、その功德によつて仏と作ることができた。そしてこの常不輕菩薩こそは、「豈、異人ならんや。則ちわが身これなり」と打ち開け、この増上慢の四衆は、また「今、この会の中の跋陀婆羅等の五百の菩薩と、師子月等の五百の比丘尼と、思仏等の五百の優婆塞との、皆阿耨多羅三藐三菩提において退転せざる者、これなり」と開示されるのである。

「常不輕菩薩品」以外の流通文十品半の經文でも、一貫して説がみられるが、「授記」の語が説かれることはないので、本論ではこれらの諸品については略した。

以上、極めて概括的に『法華經』の全体を「授記」の觀点から概説したのであるが、『法華經』では授記思想が終始貫した基調になつてゐるということについては、もはやこれ以上の贅言を要しないであろう。

声聞に対する授記は勿論のこと、提婆達多や竜女に対する授記が説かれ、やがて寿量品の久遠成佛の釈迦の開示は、一切衆生の授記作仏を示すこととなるわけである。

二

道元禪師は『正法眼藏授記』の卷で、『法華經』の「授記」の思想を独自の表現で説示している、冒頭に、

仏祖単傳の大道は授記なり。仏祖の參學なきものは夢也未

見なり。

と記し、授記が宗旨の根幹であり、授記の義を究明することが、參學の肝要である、といふ。

『授記』は引用文の上から見てみると、次の八種の文で構成されている。

(1) 仏言、それ授記に多般あれども、しばらく要略するに八種あ

り。いはゆる、

一者、自己知、他不知。

二者、衆人尽知、自己不知。

三者、自己衆人俱知。

四者、自己衆人俱不知。

五者、近覓、遠不覓。

六者、遠覓、近不知覓。

七者、俱覓。

八者、俱不覓。

かくのごとの授記あり。

(2) 玄沙院宗一大師、侍雪峰行次、雪峰指_二面前地_一云、「這一片田地、好造_二箇無縫塔_一。」玄沙曰、「高多少。」雪峰乃上下顧視。玄沙曰、「人天福報即不_レ無、和尚、靈山授記、未夢見在。」雪峰云、「爾作麼生。」玄沙曰、「七尺八尺」

(3) 古仏いはく、古今挙_レ拵_二示_一東西、大意幽微肯易參。此理若無

師教授、欲_レ將_二何見_一語_レ玄談。

(4) 古仏いはく、相繼得成仏、転次而授記。

(5) 古仏いはく、我今從仏聞、授記莊嚴事、及転次受決、身心徧歡喜。

(6) 釈迦牟尼仏、因_二藥王菩薩_一、告_二八萬大士_一、藥王、汝見_レ是大衆中、無量諸天・龍王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽、人与_ニ非人、及比丘比丘尼・優婆塞優婆夷、求_ニ聲聞者、求_ニ辟支仏者、求_ニ仏道者、如_レ是等類、咸於_ニ仏前、聞_ニ妙法華經一偈一句、乃至一念隨喜者、我皆與_ニ授記。當_レ得_ニ阿耨多羅三藐三菩提。

(7) 釈迦牟尼仏告_ニ藥王、又如來滅度之後、若有_レ人聞_ニ妙法華經、乃至一偈一句、一念隨喜者、我亦與_ニ授阿耨多羅三藐三菩提記。

(8) 維摩詰謂_ニ弥勒_一言、弥勒、世尊授_ニ仁者記、一生當_レ得_ニ阿耨多羅三藐三菩提。為_レ用_ニ何生_レ得_レ受記_ニ乎。過去耶、未來耶、現在耶。若過去生、過去生已滅。若未來生、未來生未至。若現在生、現在

生無住。如_ニ仏所說、比丘、汝今即時、亦生亦老亦滅。若以_ニ無生_ニ得_ニ受記者、無生即是正位。於_ニ正位中、亦無_ニ受記、亦無_レ得_ニ阿耨多羅三藐三菩提。云何弥勒受_ニ一生記乎。為_ニ從_ニ如生_ニ得_ニ受記_ニ耶、為_ニ從_ニ如滅_ニ得_ニ受記_ニ耶。若以_ニ如生_ニ得_ニ受記者、如無_レ有_レ生。若以_ニ如滅_ニ得_ニ受記者、如無_レ有_レ滅。一切衆生皆如也、一切法亦如也。衆聖賢亦如也、至_ニ於弥勒_ニ亦如也。若弥勒得_ニ受記者、一切衆生亦應_ニ受記。所以者何、夫如者、不二不異。若弥勒得_ニ阿耨多羅三藐三菩提者、一切衆生皆亦應_ニ得。所以者何、一切衆生即菩提相。

(1) の八種の授記の引文は、涉典研究で明らかなように『菩薩瓔珞經』の教説によつてゐる。仏が明觀菩薩に対して仏の「授記」を覺知するものと覺知できないものとがあるのは、次のような八の因縁があるからである、と説示する一段である。長文であるが、参考までにそこの全文を提示してみよう。

『菩薩瓔珞經』卷九(大正藏一六卷八一頁中一八二頁上)には、

爾時世尊觀察人心各懷_ニ狐疑。仏知_ニ其意便告_ニ明觀菩薩曰。如來至真等正覺在_ニ大衆中_ニ授_ニ菩薩決。有_ニ覺知者、不_ニ覺知者、有_ニ八因縁。云何為_ニ八。

善男子善女人。得_ニ如來決。當_ニ成_ニ無上平等正覺、一切衆人無_ニ能知者。是謂_ニ如來授_ニ衆生決。己身自覺。余人不知。

復次明觀。若有_ニ善男子善女人。在_ニ大衆中_ニ為_ニ如來所見。余人盡見、己不_ニ覺知。是謂_ニ如來授_ニ衆生決。余人盡見、己不_ニ覺

知_ニ。

復次明觀菩薩摩訶薩。若有_ニ善男子善女人。為_ニ諸仏世尊所見授_ニ決。汝當_ニ成_ニ仏其號如_ニ是。已知_ニ受決。余人亦見。是謂_ニ如來授_ニ衆生決。己自覺知。余人亦見_ニ。

復次明觀菩薩摩訶薩。若有_ニ善男子善女人。在_ニ大衆中_ニ為_ニ如來所見授_ニ決。自不_ニ覺知。余人亦不_ニ知。是謂_ニ如來授_ニ衆生決。自不_ニ覺知。余人亦不_ニ知。

仏復告_ニ明觀菩薩。若有_ニ善男子善女人。在_ニ大衆中_ニ受_ニ如來決。然此受決之人乃在_ニ未_ニ行不_ニ近_ニ如來_ニ。近_ニ如來_ニ者自謂_ニ受_ニ我決。是謂_ニ如來授_ニ衆生決。遠者覺知。近者不_ニ覺。

復次明觀菩薩摩訶薩。若有_ニ善男子善女人。在_ニ大衆中_ニ為_ニ如來所見授_ニ決。近_ニ如來_ニ者便自覺知。今日如來而授_ニ我決。遠_ニ如來_ニ者復自称說。如來今日授_ニ我等決。然此衆生未_ニ應_ニ受決。是謂_ニ如來授_ニ衆生決。近者覺知。遠者不_ニ覺。

仏復告_ニ明觀菩薩摩訶薩。若有_ニ善男子善女人。為_ニ諸仏世尊所見授_ニ決。当成仏時其號如是。近者不_ニ覺。遠亦不_ニ知。是謂_ニ如來授_ニ衆生決。遠近衆生不_ニ覺知_ニ。

仏復告_ニ明觀菩薩。若有_ニ善男子善女人。在_ニ大衆中_ニ為_ニ如來所見授_ニ決。近者亦覺。遠者亦知。余人不_ニ見。是謂_ニ如來八因縁法。授_ニ衆生決。近者亦覺。遠者亦知。余人不_ニ見。

爾時世尊。告_ニ四部衆比丘比丘尼優婆塞優婆夷菩薩摩訶薩天龍鬼神乾沓和阿須倫迦留羅真陀羅摩休勒人及非人。汝等頗見_ニ明觀菩薩受_ニ記別_ニ乎。對曰非也。世尊。

仏復告_ニ族姓子。若有_ニ菩薩摩訶薩受_ニ如來決。初發道心受別不同。今此明觀菩薩受_ニ如來決。己自覺知。余人不_ニ覺。如此等人

未_レ獲_ニ如來四無所畏。發心自誓未_ニ廣及_ニ衆生。亦復未_レ得_ニ善權方

便_一。是故受決。己自覺知。余者不_レ覺。

仏復告_ニ族姓子。若有_ニ善男子善女人受_ニ如來決。衆人盡見自不_ニ覺

知_ニ。如_レ此等人發意弘普廣及_ニ衆生。得_ニ四無畏_ニ發心廣大。有_ニ善權

方便_ニ教_ニ化衆生。是故受決。余者盡覺己不_ニ自知。

仏復告_ニ族姓子。若有_ニ善男子善女人受_ニ如來決。己身自知余者亦

見_ニ。如_レ此等人在_ニ七住地_ニ分_ニ別空觀_ニ。不_レ計_ニ衆生有_ニ染著想_ニ。初發

道心不_レ生_ニ此念。我後成佛度_ニ爾所衆生。不_レ度_ニ爾所衆生。心如_ニ

虛空_ニ不_レ可_ニ沮壞_ニ。以_レ獲_ニ如來四無所畏。得_ニ空觀三昧善權方便_ニ

是故受決。己身自知。余者亦見。

仏復告_ニ族姓子。若有_ニ善男子善女人受_ニ如來決。己身不_レ覺。余者

不_レ知_ニ。如_レ斯等人未_レ在_ニ七住不退転地_ニ。雖_ニ有_ニ善權方便_ニ信_ニ樂_ニ

尊_ニ供_ニ養承_ニ事諸_ニ仏世尊_ニ。然未_レ得_ニ如來無著之行_ニ。未_レ能_ニ淨_ニ仏國

土_ニ教_ニ化衆生_ニ。是故受決。自不_ニ覺知_ニ。余者不_レ見。

仏復告_ニ族姓子。若善男子善女人受_ニ如來決_ニ。遠者得_ニ決_ニ。近者不_レ得_ニ。如_レ此等人彌勤身是_ニ。何以故_ニ。此善男子善女人諸根具足_ニ。不_レ捨_ニ如來無著之行_ニ。是故受決。遠者自覺_ニ。近者不_レ知_ニ。

仏復告_ニ族姓子。若善男子善女人受_ニ如來決_ニ。近者覺知_ニ。遠者不_レ見_ニ。亦非_ニ衆會所_ニ能測度_ニ。如_レ此等人在_ニ菩薩位_ニ。未_レ能_ニ演_ニ說賢聖之行_ニ。今師子膺_ニ菩薩是也。衆相具足_ニ。不_レ捨_ニ法本_ニ。於_ニ無想法中_ニ不_レ壞_ニ法性_ニ。是故受決。近者覺知_ニ。遠者不_レ見_ニ。亦非_ニ衆會所_ニ能測度_ニ。

仏復告_ニ族姓子。若善男子善女人如來授_ニ決_ニ。近者亦知_ニ。遠者亦見_ニ。如_レ此等人衆行具足_ニ。行_ニ不思議無量仏事_ニ。超_ニ生死海_ニ至_ニ無為岸_ニ。何以故_ニ。此善男子善女人諸根具足_ニ。不_レ捨_ニ如來無著之行_ニ。遍遊_ニ十方無量世界_ニ。作_ニ不思議_ニ顯_ニ仏神德_ニ。今柔順菩薩是也。是故近者

亦知_ニ。遠者亦見_ニ。

仏復告_ニ族姓子。若善男子善女人受_ニ如來決_ニ。近者不_レ知_ニ。遠者不_レ見_ニ。如_レ此等人衆行未_レ具足_ニ。得_ニ善權方便_ニ。雖_ニ復去_ニ離五欲之中_ニ。未_ニ能備_ニ悉如來法藏_ニ。今等行菩薩是也。

仏復告_ニ族姓子。若有_ニ菩薩摩訶薩_ニ。奉_ニ持修_ニ習八因緣法_ニ。我今視_ニ之如_ニ己無異_ニ。亦為_ニ十方諸仏世尊所_ニ見擁護_ニ。

異本の眼藏で割註として引用する文と、対応する後段の文から順次に拾い上げると、

(一)己自覺知。余人不覺。

(二)衆人盡見。自不覺知。

(三)己身自知。余者亦見。

(四)己身不覺。余者不知。

(五)遠者自覺。近者不知。

(六)近者覺知。遠者不見。

(七)近者亦知。遠者亦見。

(八)近者不知。遠者不見。

のよう記されている。『授記』の引用文と前の原文とを較べると五と六が入れ交わっており、表現も少しく異なっている。

しかるに『瓔珞經』を引用する点で他の註釈との相違が見られる天台智顗の『法華文句』の『授記品』の釈を参照してみると、道元禪師の引用文と順序もぴったりであるし、「自己」と「衆人」の表現が異なるだけで同一の文であることが

知られる。「余經又云」以下は、後に指摘すべきことであるが預め提示しておきたい。

『法華文句』卷七上（大正藏三四卷九七頁中）には、次のように出る。

瓔珞第九八種授記。己知他不知。衆人尽知己不知。己衆俱知。己衆俱不知。近覺遠不覺。遠覺近不覺。俱覺。俱不覺。

己知他不知。發心自誓未廣及人。未得四無所畏。未得善權故。

衆人尽知己不知。發心廣大得無畏善權故。

皆知者。位在七地無畏善權得空觀故。

皆不知者。未入七地。未得無著行云云。

遠者不覺者。弥勒是也。諸根具足不捨如來無著之行故。

近者不覺者。此人未能演說賢聖之行。師子膺是也。

近遠俱覺者。諸根具足。不捨無著之行。柔順菩薩是也。

近遠俱不覺者。未得善權。不能悉知如來藏等行菩薩是也。

余經又云。近知者。從現仏得記也。如彌勒等。遠知者。不從今仏。從當仏得記。如仏語弊魔。彌勒當與汝記。近遠俱知者。今當仏俱与記也。近遠俱不知者。今當仏俱不記也。

元諸仏本為大事因緣出世。令衆生開示悟入仏之知見。今大事已顯。仏已說竟。衆生已入。暢仏本懷。衆生願滿。法應与記。如父遇子。豈不付財。又行人無量世行願。願在今仏。文云。其本願如此。故獲斯記。此兩緣是世界悉檀故記。

又二乘聞經。改小入大。円因已足。因必招果故。如來与記。時衆咸知發願。願為生身法身内外眷屬。或願但生彼土。饒益

衆生。此兩是為人悉檀与記。

又授三乘記。破欲退大入小菩薩。何者。若定有三乘。可退為小。今無三乘。何所可退。又破欲發三乘心者。彼証自捨我何為取。又破未改小者。則便改小。將証小者。即不取証。此四對治悉檀与記。

又無生現前。必由三實解。開三仏知見。不謬。又明了三仏性。故與受記。小乘入實。決定作仏。若爾。一切衆生亦有三仏性。何不與記。然衆生但正無緣。今聞經信解緣正具足。開三仏知見。知三仏性。見三仏法。見三仏性。此兩第一義悉檀与記。此四記攝上諸受記。盡云云。

道元禅師の『授記』は、この『法華文句』授記品の釈に基づいて提唱されたことが知られる。

本論引用の『授記』の原文は、大久保道舟編『道元禅師全集』（昭和四四年・筑摩書房）上巻（一九五〇）所収の洞雲寺所蔵本を底本とするものであるが、校訂に用いた、乾坤院所蔵本・正法寺所蔵本・玉雲寺所蔵本なども本山開版本によつている岩波文庫本『正法眼藏』にみえるような引用文があることが脚註に記されている。

参考までに示すと次のようである。

仏言、それ授記に多般あれども、しばらく要略するに八種あり、いはゆる、「瓔珞第九八種授記アリ」〔〕の文は本山版にはない

得四無所畏。未得善權故。」（割註）

二者、衆人尽知、自己不知。〔衆人尽知已不知者。發心廣大、得無畏善權故。〕

三者、自己衆人俱知。〔皆知者。位在七地。無畏善權得空觀故。〕
四者、自己衆人俱不知。〔皆不知者。未入七地、未得無著之行。〕

五者、近覺遠不_v覺。〔遠者不覺者、彌勒是也。諸根具足。不捨如來無著行故。〕

六者、遠覺近不_v覺。〔近者不覺者、此人未能演說賢聖之行、師子膺是也。〕

七者、俱覺。〔近遠俱覺者、諸根具足、不捨無著之行、柔順菩薩是也。〕

八者、俱不覺。〔近遠俱不覺者、未得善權。不能知如來藏、等行菩薩是也。〕

余經又云。近知者「從_v現仏_v得_v記也。如彌勒等。」遠知者、「不從今仏、從當仏得記、如仏語弊魔弥勒當與汝記。」遠近俱知者、「今當仏俱与記也。」近遠俱不_v知者。「今當仏俱不記也。」

かくのことくの授記あり。

「余經又云」以下の引用文を含めて、まぎれもなくこの引文が『法華文句』から引用されたものであることが知られる。これらの諸本では、この引文が『瓔珞經』そのものからの引用であるよりも、一層明確に『法華文句』からの引用であることを自覚していたかと推定される。

この点、『御抄』が「是瓔珞經ノ文歟」と記すのみで、果してどうなのが、ほとんど典故に関心をはらうことがないの

は、一つの限界を示すようである。道元禪師の宗旨の独自性は、従来の研究との共通面を押さえることによって、一層鮮明になるからである。但し経豪がおかれていった歴史情況が、そういう研究方法を許さなかつたかどうかは、別の課題であり、一概に断定はできない。

(4)の文は、『法華經』「五百弟子授記品」第八からの引用である。「序品」第一（大正藏九卷五頁中）にも、全く同文の二句がみえるが、(5)の引用文との関係でみれば、「五百弟子授記品」からの引用とみる方が穩当であろう。

(5)の文は、(4)と同じ個所に出る「五百弟子授記品」の文である。

(6)(7)の文は、同じく「法師品」第十からの引用である。

(8)の文は、引文の中に明示されるように『維摩詰所說經』卷上「菩薩品」第四からの引用である。仏が彌勒菩薩に維摩詰の病氣を見舞うようにいったところ、彌勒は昔あつた維摩との出会いを想い起して、そのような大任は自分のようなものにとうてい果たすことはできないといつてことわる段にある文である。引文の前後を含めて、この一段の全文を示すと次のとおりである。

『維摩詰所說經』菩薩品（大正藏一四卷五四二頁上～下）に次のように出る。

於是仏告_v彌勒菩薩。汝行_v詣維摩詰_v問_v疾。彌勒白_v仏言。世尊。

我不堪任詣。彼問疾。所以者何。憶念我昔為兜率天王及其眷屬。說不退転地之行。時維摩詰來謂我言。弥勒。世尊授仁者記。一生當得阿耨多羅三藐三菩提。為用何生。得受記乎。過去耶未來耶現在耶。若過去生過去生已滅。若未來生未來生未至。若現在生現在生無住。如云仏所說。比丘汝今即時亦生亦老亦滅。若以無生得受記者。無生即是正位。於正位中亦無受記。亦無得阿耨多羅三藐三菩提。云何弥勒受一生記乎。為從如生得受記耶。為從如滅得受記耶。若以如生得受記者。如無有生。若以如滅得受記者。如無有滅。一切衆生皆如也。一切法亦如也。衆聖賢亦如也。至於弥勒亦如也。若弥勒得受記者。一切衆生亦應受記。所以者何。夫如者不二不異。若弥勒得阿耨多羅三藐三菩提者。一切衆生皆亦應得。所以者何。一切衆生即菩提相。若弥勒得滅度者。一切衆生亦應滅度。所以者何。諸仏知一切衆生畢竟寂滅。即涅槃相。不復更滅。是故弥勒無以此法誘諸天子。實無發阿耨多羅三藐三菩提心者。亦無退者。弥勒當令此諸天子捨於分別菩提之見。所以者菩提者。不可以為身得。不可以為心得。寂滅是菩提。滅諸相故。不觀是菩提。離諸緣故。不行是菩提。無憶念故。斷是菩提。捨諸見故。離是菩提。離諸妄想故。障是菩提。障諸願故。不入是菩提。離貪著故。順是菩提。順於相故。住是菩提。住法性故。至是菩提。至實際故。不二是菩提。離意法故。等是菩提。等虛空故。無為是菩提。無生住滅故。知是菩提。了衆生心行故。不会是菩提。諸入不会故。不合是菩提。離煩惱習故。無處是菩提。無形色故。假名是菩提。名字空故。如化是菩提。無取捨故。無亂是菩提。常自靜故。善寂是菩提。如化是菩提。無取捨故。無亂是菩提。常自靜故。現前無生。三周記是也。

性清淨故。無取是菩提。離攀緣故。無異是菩提。諸法等故。無比是菩提。無可喻故。微妙是菩提。諸法難知故。世尊。維摩詰說是法。時。二百天子得無生法忍。故我不堪任詣。彼問疾。ところで、『維摩經』のこの文は、『法華經』の授記思想と矛盾するものではないか、という議論が古くから行なわれていた。道元禪師も多分このことを承知の上で、最後にこの文を引用して独自の解釈を示すのである。それも『法華文句』の「授記品」の課題を下敷きにしているのであらうことが推定できる。

『法華文句』卷七上「釈授記品」の冒頭には次のように出る。

梵音和伽羅。此云授記。諸經破受記。淨名云。從如生得記。從如滅得記。如無生滅則知無記。思益云。願不聞記名。大品云。受記是戲論。今經云何。答。若見有記記人。此見須破。菩薩舊記。此記須与。世諦故記。第一義故無。四悉適時。如以下說。若通途記。如法師品初。若別與記。如三周後說。若正因記如常不輕。若緣因記如法師品十種供養。若了因記如授三根人。若正因記則廣。若緣了記則狹。或遲記。或速記。或仏記如此文。或菩薩記如不輕。雖無劫國之定。亦得是記。復懸記如化城品未來弟子是也。他經但記菩薩不記二乘。但記善不記惡。但記男不記女。但記人天不記畜。今經皆記。若首楞嚴有四種記。今經具之。未發心与記。如常不輕品。發心現前無生。三周記是也。

すなわち、『維摩經』『思益經』『大品經』に出る、一見して

受記を破斥するかのような諸説と、『法華經』の受記説とは矛盾しないか、という間に對して、矛盾はないと答えてい

る。受記という何か固有なものがあつてそういうものを人に与えるのが授記であると解する時には、これを破さなければならぬからそのように破するのであるが、菩薩が記を書うときは、これを与えるのである。さらに他經では、ただ菩薩のみに与えて、二乘には授記を与へず、さらに、ただ善のみに記して惡には記を与へず、ただ男のみに記して女には記を与へず、ただ人天のみに記して畜生には記を与えることはなかつたのであるが、今の法華經は、すべてのものに受記を与えるのである。未發心のものにも記を与えることは勿論であると記している。

このような解釈に徴して見ると、道元禪師の『維摩經』の引用も、伝統的な『法華經』の研究史を踏まえたものであり、従来は等閑にふされていた義を禪師の立場から一層鮮明に提示された課題であることが知られよう。そして(1)の『瓔珞經』の引用と合せていえば、『法華文句』の「授記」解釈を下敷きにしていることは明らかである。

(2)と(3)の引文は、(2)の文は、『聯燈會要』卷二三の『玄沙章』(正統藏二乙・九・五・四〇九丁左下)に出、(3)の文は、『景德傳燈錄』卷二九の「雪頂山德敷詩」の中間の四句を省略し

て引用したものである。

『景德傳燈錄』卷二九(大正藏五一卷四五六頁中)「雪頂山僧德敷詩十首」の第十首「古今大意」に次のようにある。

古今大意

古今以_レ公示_ニ東南_レ。大意幽微肯易_レ參。動指掩頭元是_一。斜眸拊掌固非_三。道吾無笏同人會。石翬鬱_ニ作者譜。此理若無_ニ師印授。欲_ニ將_ニ何見_一語_ニ玄談_上

以上、引用典拠の上からみて、道元禪師の『授記』は、『法華經』の授記の思想を中心課題としつつ、『法華文句』の解釈を参照し、それに加えて、正伝の仏法(玄沙・徳敷の立場)の視点を導入し、この視点によつて伝統的な授記の理解が道元禪師の立場で新たに読みなおされていることが知られる。

それは、次節で考究されるように、従来の法華学の枠を超えて、中国禪宗学に対しても新たな視点で豊かな肉付けを果たす、道元禪師一流の特質ある授記思想を展開するのである。

三

道元禪師は、『正法眼藏授記』の冒頭に、「仏祖單傳の大道は授記なり。仏祖の參學なきものは、夢也未見なり」と記し、「授記」を究明することが參學の根本であることを表明する。このことは後に、

仏祖祖嫡相承せるは、これただ授記のみなり、さらに一法と

しても授記にあらざるなし。いかにいはんや山河大地・須弥巨海あらんや、さらに一箇半箇の張三李四なきなり。

と結ぶ文意に通底していく。したがつて、授記の意が体得できたら、仏道の真実に契当できる道理である。このところを、

授記に飽学措大なるとき、仏道に飽学措大なり。

と結ぶ。

それでは一体、どのように弁えたらよいのか。その一点を次のように示す。

その授記の時節は、いまだ菩提心をおこさざるものにも授記す。無

仏性に授記す、有仏性に授記す。有身に授記し、無身に授記す。

諸仏に授記す。諸仏は諸仏の授記を保任するなり。得授記ののちに作仏すと参考すべからず、作仏ののちに得授記すと参考すべからず。授記時に作仏あり、授記時に修行あり。このゆゑに、諸仏

に授記あり、仏向上に授記あり。自己に授記す、身心に授記す。

『御抄』に、

諸仏ハ諸仏ノ授記ヲ保任ス、ト云詞、難心得、祖門ノ授記ノ道理ニテハ、此如イハルル也、機法ノニヲ並テ不談ユヘニ、諸仏ハ諸仏ノ授記ヲ保任スル道理ナルヘキ也。

という註釈も、一流の釈を主張するあまり、従来の法華学の成果を過少評価することになりはしなかつたか。いずれにしているが、説かれている内容は、『法華經』の授記思想をどのように読むべきかということであり、伝統的な理解の枠を大きく超えるものではないといえる。

しかし『御聞書』

授記ト云事、一代教門ノ見処ハ、三周上中下根声聞ニ対シテ云ニハ、法華以前ハ、不可成仏トキラハレテ、而彈呵淘汰ノ調熟ヲヘテ、イマ法華ノ会ニシテ、初住無生ノ位ニ叶モ、未來ニ可成仏ト授記

授記を与えるとき（法華の時）には、菩提心のないものにも授記を与える。仏性の有・無、身の有・無にかかわらず授記を与える。それだけではない。仏が仏に与え、仏がその授記を自ら行づる。だから、授記を得てから作仏するのだとか、作仏してから授記を得るのだとか、というように解して

ヲカウフリテ、淨仏国土成就衆生ノ願ヲコス、是コソ授記トハココロウレトモ、今ハ又シカニハアラス、コノ卷ニアカス如ク、授記ヲ心得ヘキ姿サマサマナリ、教ニ二乗他ヲ化スル心ナキユヘニ、所被ノ機縁ナシ、其機ナケレハ八相成道ノ義不可叶、シカレトモ内証ニハ、初住無所ノ位ニ叶ヌレハ、化度衆生ノ行ヲ立テ、未来成仏ノ授記ヲカウフルナリ、

はならない。授記の時に作仏があり、授記の時に修行があると解すべきである。仏の上で授記が説かれるのである。それは同時に、自己の身心に授記が与えられていることを意味する。

前述の『法華文句』に、

他經但記菩薩不_レ記二乘。但記善不_レ記惡。但記男不_レ記女。
但記人天不_レ記畜。今經皆記。若首楞嚴有四種記。今經具_レ之。
未發心与_レ記。如常不輕品。發心・現前・無生。三周記是也。

とあつた表現を想起してみるといいだろう。また「授記時に作仏あり、授記時に修行あり。このゆゑに、諸仏に授記あり、仏向上に授記あり」にいたる一段は、本門の授記に対応するものといえよう。

しかるに、道元禅師の表現の独自性は、最後の「自己」に授記す、身心に授記す」の一文に顕著であり、いわばここが『授記』の変換点である。これは『法華経』を色読し、上行菩薩の再生と体認した日蓮上人の経文の読み方に一脈通ずるところがあるように感じられる。道元禅師は、これを徹底して、自己の身心の問題として転換する。

身前に授記あり、身後に授記あり。自己にしらるる授記あり、自己にしられざる授記あり、他をしてしらしむる授記あり、他をしてしらしめざる授記あり。

自己の身心は、始めも終りも授記の中にある。自己・他己

の知覚を超えて、冥顯すべてが授記であるという。これはすぐ後に『瓔珞経』の教説にもとづく『法華文句』からの引用文の提唱と連関する。かくして、

まさにしるべし、授記は自己を現成せり、授記これ現成の自己なり。

という表現となる。授記は、自己を現成させるものであり、かつ授記は現成している自己以外のものではない、という。かくのごとく参究する授記は、道得一句なり、聞得一句なり。不_レ会一句なり、会取一句なり。行取なり、説取なり。退歩を教令せしめ、進歩を教令せしむ。いま得坐披衣、これ古來の得授記にあらざれば現成せざるなり。合掌頂戴なるがゆゑに、現成は授記なり。

このような意味で、授記は、言われている一句、聞いた一句、解らない一句、解った一句にあるといえようし、行じられてること、説かれていることであり、進歩・退歩を命じるものである。日常の得坐披衣、合掌頂戴などの坐作進退は、みな授記の中で現成するものである、という。

殊に最後の一文は、『伝衣』の巻に出る説と通底するものであろう。参考までにその一段の文を掲げてみると次の如くである。『悲華経』卷八「諸菩薩本授記品」（大正藏三卷二二〇頁上の取意抄出）の経文を引いて次のように提唱している。

仏言。若有衆生入我法中。或犯重罪。或墮邪見。於一念中。敬心尊重僧伽梨衣。諸仏及我。必於三乘。授記此人當得作

仏。若天若龍。若人若鬼。若能恭敬此人袈裟少分功德。即得三乘。不退不転。若有_ニ鬼神及諸衆生。能得_ニ袈裟乃至四寸。飲食充足。若有_ニ衆生。共相違反。欲_ニ墮_ニ邪見。念_ニ袈裟力。依_ニ袈裟力。尋生_ニ悲心。還得_ニ清淨。若有_ニ人。在_ニ兵陣。持_ニ此袈裟少分。恭敬尊重。當_ニ得_ニ解脱。

しかあればしりぬ、袈裟の功德、それ無上不可思議なり。これを信受護持するところに、かならず得授記あるべし、得不退あるべし。ただ釈迦牟尼仏のみにあらず、一切諸仏またかくのごとく宣説しますなり。しるべし、ただ諸仏の体相、すなはち袈裟なり。すなわち、『授記』の立場でいえば、授記を得たものは、無上不可思議なる功德をそなえた袈裟を信受護持し、合掌頂戴すべきである、ということになる。

次いで『授記』は、(1)の『法華文句』からの引用文を示し、八種の授記説を踏えて次のように説いている。

しかあれば、いまこの臭皮袋の精魂に識度せられざるには授記あらべからずと活計することなかれ、未悟の人間にたやすく授記すべからずといふことなかれ。よのつねにおもふには、修行功満じて作仏決定するとき授記すべしと学しきたるといへども、仏道はしかにはあらず。或従知識して一句をきき、或従經卷して一句をきくことあるは、すなはち得授記なり。これ諸仏の本行なるがゆゑに。百草の善根なるがゆゑに。もし授記を道取するには、得記人みな究竟人なるべし。

人の認識や自覚にのぼらない限りは授記ではないと考えて

はならない。「自己にしらるる授記」もあるが、「自己にしらざる授記」があり、「他をしてしらしむる授記」もあるが、「他をしてしらしめざる授記」があるからである。また悟つてもいない人に授記が与えられるはずがないといつてはならない。一般には、修行が満ちて作仏が決定したときに授記を得るのだと考えられているが、それでは仏道にはならない。知識にしたがつて一句をきき、経巻にしたがつて一句をきけば、それで授記を得るのである。それが諸仏の「本行」であるからである。それが百草の善根であるからである。授記とはこのようなものであると解ることができれば、授記を得た人はみな究竟人であることが知られよう。

この一段を『御抄』は、

今授記ノ道理ヲ参考セム人、皆得記人、究竟人ナルヘキ条勿論也、公界ノ調度ナル受記ノ理ニクラクシテ、迷惑ノ方ヲ執シテ、此吾我ノ身心ニテハ、争得記人ナルヘキ、究竟人ニアルヘカラスト思所カ、今ノ授記ノ道理ニ、背所ヲ被制也、此身心ハ皆授記ノ理ニ被里礙、藏身シタルナル、返々タノモシキ事也、

と註している。

「本行」は「寿量品」に出る「我本行ニ菩薩道所レ成寿命。今猶未_レ尽。復倍ニ上数」とある經文の語である。道元禪師は、この語を例え_ニ『法華転法華』に、

衆生所遊樂を我淨土不毀と常在せるをも、審細に本行すべきなり。

とか、

しかあれば、われらがいまの相性、この法界に本行すとやせん、
微塵に本行すとやせん。驚疑なし、怖畏なし。ただ法華転の本行
なる、深遠長遠なるのみなり。

というように、自己の今の課題と直接する意に用いている。

「百草の善根なるがゆゑに」の一旬は、唐突のようである
が、「もし授記を道取するには、得記人みな究竟人なるべし」
の表現なども、極めて大胆な道元禅師の言葉であろう。

しるべし、一塵なほ無上なり、一塵なほ向上なり。授記なんぞ一
塵ならざらん、授記なんぞ一法ならざらん、授記なんぞ萬法なら
ざらん、授記なんぞ修証ならざらん、授記なんぞ仏祖ならざら
ん、授記なんぞ功夫弁道ならざらん、授記なんぞ大悟大迷ならざ
らん。授記はこれ吾宗到汝、大興于世なり。授記はこれ汝亦如
是、吾亦如是なり。授記これ標榜なり、授記これ何必なり。授記
これ破顔微笑なり、授記これ生死去來なり。授記これ尽十方界な
り、授記これ徧界不曾藏なり。

「和尚、靈山授記、未夢見在」という玄沙師備の語は、雪
峰義存が靈山の授記の意がわかつていらないという意味ではな
い。いわば、玄沙と雪峰は同道唱和をなしているのにはかな
らないという。

靈山の授記は、高著眼なり。吾有正法眼藏涅槃妙心、附囑摩訶迦
葉なり。しるべし、青原の石頭に授記せしどきの同參は、摩訶迦
葉も青原の授記をうく、青原も釈迦の授記をさづくるがゆゑに、
仏祖の面面に、正法眼藏附囑有在なることあきらかなり。こ
こをもて、曹谿すでに青原に授記す。青原すでに六祖の授記をう
くるとき、授記に保任せる青原なり。このとき、六祖諸祖の參
学、正直に青原の授記によりて行取しきたれるなり。これを明明
百草頭、光明仏祖意といふ。

ともあれ「靈山の授記」という玄沙の語は眼の著けどころ
がいい。「和尚、これが靈山の授記なんですね。夢にも見た
ことのない感激です」というほどの意である。それは「吾有正
法の印」であり、「何必」（恁麼のあるべきありよう）で
ある。「破顔微笑」も、「生死去來」も、「尽十方界」も、「徧

界不曾藏」も、みな授記である。

かくして『法華經』の授記から説き起こして、それを敷衍

して、禪語の授記に説き及ぶ。

(2)の雪峰と玄沙の問答を引用した後に、次のように提示す
る。

いま玄沙のいふ和尚靈山授記、未夢見在は、雪峰に靈山の授記な
しといふにあらず、雪峰に靈山の授記ありといふにあらず、和尚
靈山授記、未夢見在といふなり。

法眼藏涅槃妙心、附囑摩訶迦葉」といつて、釈尊が靈山会上で、拈華微笑して、この妙心を摩訶迦葉に伝えた意と同じである。思うに、青原行思が石頭希遷に授記した時、実は摩訶迦葉も青原行思の授記を受けているのである。なぜなら青原は釈迦の授記をさうかり、釈迦の授記を行つてゐるのであるからである（『法華經』の父少子老の喻によつて象徴される授記と同意である）。このようにして青原の授記によつて諸仏諸祖の方面に正法眼藏涅槃妙心が附囑され、かつ現実のものとされるのである。まさしく「あらゆるものに授記の意が現成していり」といわなければならない。

しかあればすなはち、仏祖いづれか百草にあらざらん、百草なんぞ吾汝にあらざらん。至愚にしておもふことなけれ、みづからに具足する法は、みづからかならずしるべしと、みるべしと。恁麼にあらざるなり。自己の知する法、かならずしも自己の有にあらず。自己の有、かならずしも自己のみるところならず、自己のしるところならず。しかあれば、いまの知見思量分にあたはざれば自己にあるべからずと疑著することなけれ。いはんや靈山の授記といふは、釈迦牟尼仏の授記なり。この授記は、釈迦牟尼仏の釈迦牟尼仏に授記しきたれるなり。授記なきに授記するに剩法せざる道理なり。授記の未合なるには、授記せざる道理なるべし」というのも、『法華』のそれである。授記に授記を重ねてもさまたげはないのであり、また授記したからといって別に何かを増すわけでもない。欠けることもなく、余ることもないと仏が仏に伝えた授記を知らなければならぬというのである。

この一段を(3)の引用文で結ぶ。

古今挙^レ弘示^ニ東南^ニ。大意幽微^レ音易^レ参^ス。此理若無^ニ師教授^ス。欲^レ將^ニ何見^レ語^レ玄談^ス。

初めの「仏祖いづれか百草にあらざらん。百草なんぞ吾汝

にあらざらん」の文は、前記の「明明百草頭、明明仏祖意」を承け、さらに前出の「諸仏の本行なるがゆゑに、百草の善根なるがゆゑに」の文を承けるものである。「さらに一法としても授記にあらざるなし」という場所では、仏祖、百草もみな授記によつてあらしめられていることを表わす。

「いまの知見思量分にあたはざれば自己にあるべからずと疑著することなけれ」までの文は、前述したように覚知を超えてある法のありようを示す。

「靈山の授記」は、今はしばらく『大梵天王問仏決疑經』『拈華品』のそれをいうのであるが、底意はそれによつて『法華經』の授記に重ねていると見るべきであろう。

「この授記は、釈迦牟尼仏の釈迦牟尼仏に授記しきたれるなり」というのは一見奇抜な表現のようであるが、『法華經』の授記の核心を突いている。「授記の未合なるには、授記せざる道理なるべし」というのも、『法華』のそれである。授記に授記を重ねてもさまたげはないのであり、また授記したからといって別に何かを増すわけでもない。欠けることもなく、余ることもないと仏が仏に伝えた授記を知らなければならぬというのである。

古今の学者が指針となるべきことを教えている。その大意は幽微であつて参究は決して易しくはない。この理も師の教授がなかつたら、一体どのようにその奥深い義を語つていいものやら、見当もつかないであろう。

前記の「和尚靈山授記、未夢見在」の意味をこの古今大意のような意味で読むべきであるというのである。そこで、

いま玄沙の宗旨を参究するに、無縫塔の高多少を量するに、高多少の道得るべし。さらに五百由旬にあらず、八萬由旬にあらず。

これによりて、上下を顧視するをきらふにあらず。ただこれ人天の福報は即不無なりとも、無縫塔高を顧視するは、釈迦牟尼仏の授記にはあらざるのみなり。釈迦牟尼仏の授記をうるは、七尺八尺の道得あるなり。真箇の釈迦牟尼仏の授記を点検することは、七尺八尺の道得をもて検点すべきなり。しかあればすなはち、七尺八尺の道得を是不是せんことはしばらくおく、授記はさだめて雪峰の授記あるべし、玄沙の授記あるべきなり。いはんや授記を挙して無縫塔高の多少を道得すべきなり。授記にあらざらんを挙して仏法を道得するは、道得にはあらざるべきなり。

と解する理由が明らかになる。雪峰が面前の地を指して「ちょうどこの田地は、無縫塔を造るのに適している」という。玄沙は「高さはどれくらいですか」と問う。雪峰は、黙つて上下を顧視した。無縫塔の大きさを示すには「高多少」といわなければならぬし、その田地にふさわしい大きさを示すためには上下を顧視すれば充分だ。何んという幸いである

う。これこそ雪峰の授記なのだ。それだけではない。釈迦牟尼仏の授記を現成させている。玄沙の「七尺八尺ばかりでしょうか」という語は、そのことを点検する。「七尺八尺」の語の是否を詮索することはしばらくおくとしても、靈山の授記が、雪峰の授記となり、玄沙の授記となつているところを、しかと見るべきである。したがつてこの問答は「授記」の何たるかを示していることが知られよう。すなわち、

自己の真箇に自己なるを会取し聞取し道取すれば、さだめて授記の現成する公案あるなり。授記の当陽に、授記と同参する功夫きたるなり、授記を究竟せんためには、如許多の仏祖は現成正覺しきたれり。授記の功夫するちから、諸仏を推出するなり。このゆゑに、唯以一大事因縁故出現といふなり。その宗旨は、向上には非自己かならず非自己の授記をうるなり。このゆゑに、諸仏は諸仏の授記をうるなり。

おほよそ授記は、一手を挙して授記し、両手を挙して授記し、千手眼を挙して授記し、授記せらる。あるいは優曇華を挙して授記す、あるいは金襴衣を拈じて授記す、ともにこれ強為にあらず、授記の云為なり。内よりうる授記あるべし、外よりうる授記あるべし。内外を参究せん道理は、授記に参考すべし。授記の学道は、萬里一条鉄なり。授記の元坐は、一念萬年なり。

雪峰や玄沙のよう、真箇、自己を表現するならば、授記が「現成する公案」となるのである。授記を究竟しようとして仏祖は成仏し、この授記が諸仏を推出したといつてもいい。

『法華經』が「唯以ニ一大事因縁故出現於世」というのはこの意である。したがつて諸仏には諸仏の授記があることになる。

すなわち、一手を挙げる授記もあり、金襴衣を拈する授記などもあるであろう。これは奇をてらった所作ではない。授記の云為（自然のはたらき）であり、何必である。内よりうる授記もあろうし、外よりうる授記もあろう。内外（不二）の意は、この授記についてみるのが一番いい。授記は学道のすべてであり、授記は坐禅のすべてである。

ここで、(4)の「相繼得成仏・転次而授記」の『法華經』の文を引いて、次のように提示する。すぐ前の「授記の学道は萬里一条鉄なり。授記の兀坐は、一念萬年なり」の余意を承ることが知られる。すなわち、

いはくの成仏は、かららず相繼するなり。相繼する少許を成仏するなり。これを授記の転次するなり。転次は転得転なり、転次は次得次なり。たとへば造次なり。造次は施為なり。その施為は、局量の造身にあらず、局量の造境にあらず、度量の造作にあらず、造心にあらざるなり。まさに造境不造境、ともに転次の道理に一任して究弁すべし。造作不造作、ともに転次の道理に一任して究弁すべし。いま諸仏諸祖の現成するは、施為に転次せらるるなり。五祖六祖の西来する、施為に転次せらるるなり。いはんや運水般柴は、転次しきたるなり。即心是仏の現生する、転次なり。即心是仏の滅度する、一滅度二滅度をめづらしくするにあらず、如許

多くの滅度を滅度すべし、如許多の成道を成道すべし、如許多の相好を相好すべし。これすなはち相繼得成仏なり。相繼得滅度等なり。相繼得授記なり、相繼得転次なり。転次は本来にあらず、ただ七通八達なり。いま仏面祖面の面面に相見し、面面に相逢するは相繼なり。仏授記祖授記の転次する、廻避のところ閒隙あらず。

「成仏は、かららず相繼する」。だから「相繼する少許を成仏する」のだといつてもいい。「授記」が転次する、というのは、このことだ。しかし、「転次」といつても、何か物を次から次へと受け渡す意にとつてはならない。

『御聞書』には「転次ハ大地有情同時成道ト可心得、世間ニ仰テ心得ニハ、タゞ次第ニメクルト覚ニ」と註している。

「造次」「施為」ほどの意で、自らがなす意でなければならぬ。その施為、造次は手や足などで、あることを、これだけした、してやつた、というような限定をもつたものではない。だから、何をどのようにしたかなさなかつたか、といふことは、いつもこの「転次」の道理によせてわきまえなければならない。正に、仏祖が現成した「転次」は、施為によって転次したものである。五祖が五祖となり、六祖が六祖となつたのも、運水般柴の施為によつて転次されたものである。即心是仏が現生し、滅度する。それは一度や二度のことではない。諸仏諸祖の滅度があり、諸仏諸祖の成道があり、諸仏諸祖の相好があつた。「相繼得成仏」の意はこのようない。

ことである。だから「相繼得成仏」は「相繼得滅度」「相繼得授記」といってもいい道理で、また「相繼得転次」ともいえる。「転次は転得転」「転次は次得次」だからである。このように「転次」は、本来自然にあるものではなく、七に通じ、八に達することである。仏仏祖祖が面面に相い見え、面面に相い逢うのが「相繼」ということである。仏が授記し、祖が授記するというように転次して、どこにいつても間隙はない。そこで、(5)の五百弟子授記品の引用文、すなわち「我今從_レ仏聞_ニ、授記莊嚴事、及転次受決、身心徧歡喜」の経文を引いた後に、次のように提示する。

いふところは、授記莊嚴事、かならず我今從_レ仏聞なり。我今從_レ仏聞の及転次受決するといふは、身心徧歡喜なり。及転次は我今なるべし、過現当の自他にかかるべからず。從_レ仏聞なるべし。授記莊嚴事なり、及転次受決なり。転次の道理、しばらくも一隅にとどまりぬることなし。身心徧歡喜しもてゆくなり。歡喜なる及転次受決、かならず身と同参して徧參し、心と同参して徧參す。さらに又、身はかならず心に徧ず、心はかならず身に徧ずるゆゑに、身心徧といふ。すなはちこれ徧界徧方、徧身徧心なり。これすなはち特地一条の歡喜なり。その歡喜、あらはに寤寐を歡喜せしめ、迷悟を歡喜せしむるに、おのとのと親切なりといへども、おのとの不染汙なり。かるがゆゑに、転次而受決なる授記莊嚴事なり。

引用文の読みの押えどころを簡明に提示している。「及転

次は我今なるべし」。転次は我、今のことであり、過去だとか、現在だとか、未来だとかの自他にかかる意ではないと。それも所詮は我、今の問題でなければならない。それは仏から聞いていることがらである。転次の、我、今の道理は、しばらくも停滞することはなく、身心に徧する歡喜として知られる。身は心であり、心は身であるから「身心徧」という。「徧身徧心」の意であり、それは「徧界徧方」の意である。この特地一条の歡喜は、迷・悟、寤・寐を歡喜させるのであるが、迷・悟にならずむことはない。転次して受決する、授記莊嚴のようすは、これほどのことである。

(6)の法師品の引用文の後には次のように記している。

しかあればすなはち、いまの無量なる衆会、あるいは天王龍王・四部八部・所求所解ことなりといへども、たれか妙法にあらざらん一句一偈をきかしめん。いかならんなんぢが乃至一念も、他法を隨喜せしめん。如是等類といふは、これ法華類なり。咸於仏前といふは、咸於仏中なり。人与非人の萬像に錯認するありとも、百草に下種せるありとも、如是等類なるべし。如是等類は、我皆与授記なり。我皆与授記の頭正尾正なる、すなはち當得阿耨多羅三藐三菩提なり。

『法華經』の会座では、所求所解がことなつていつても、すべてのものに「妙法」の一句一偈を聞かせるのであり、「乃至一念」にも妙法を隨喜させるのである。「如是等類」は、みな『法華經』の眷属であり、「咸於仏前」は、みな仏の中

にある、という意にほかならない。「人与非人」の萬像に錯認しているものも、百草のまだ芽を出していないものも、「如是等類」に含まれている。「如是等類」は、始めから終りまで

みな「我皆与授記」ものであり、「當得阿耨多羅三藐三菩提」のものである。

(7) の法師品の引文を示し、次のように提示する。

いまいふ如來滅度之後は、いづれの時節到来なるべきぞ。四十九年なるか、八十年中なるか。しばらく八十年中なるべし。若有人聞妙法華經、乃至一偈一句、一念隨喜といふは、有智の所聞なるか、無智の所聞なるか。あやまりてきくか、あやまらずしてきくか。為他道せば、若有人の所聞なるべし、さらに有智無智等の諸類なりとすることなかれ。いふべし、聞法華經はたとひ甚深無量なるいく諸仏智慧なりとも、きくにはからず一句なり、きくにはからず一偈なり、きくにはからず一念隨喜なり。このとき、我亦与授阿耨多羅三藐三菩提記なるべし。亦与授記あり、皆与授記あり。蹉過の張三に一任せしむることなかれ、審細の功夫に同參すべし。句偈隨喜を若有人聞なるべし、皮肉骨髓を頭上安頭するにいとまあらす。見授阿耨多羅三藐三菩提記は、我願既満なり、如許皮袋なるべし。衆望亦足なり、如許若有人聞ならん。拈松枝の授記あり、拈優曇華の授記あり。拈瞬目の授記あり、拈破顔の授記あり。靸鞋を転受せし蹤跡あり、そこばくのは是法非思量分別之所能解なるべし。我身是也の授記あり、汝身是也の授記あり。この道理、よく過去・現在・未来を授記するなり。授記中の過去・現在・未来なるがゆゑに、自授記に現成し、他授記に現成

するなり。

経文の「如來滅度之後」とは、いつか。敢えていえば八年の中であろう。「若有人聞妙法華經、乃至一偈一句、一念隨喜」とは、有智、無智に問わらず、「若有人」が聞くことである。聞くのは、たとえ甚深無量なる諸仏の智慧でも、かならず一句であり、一偈であり、からず「一念隨喜」である。このとき「我亦与授阿耨多羅三藐三菩提記」である。「亦与授記」「皆与授記」である。このところをおろそかにせず審細に功夫すべきである。一句一偈を隨喜すること、それが「苦有人聞」の意でなければならない。この外はよけいな詮索だ。だから「見授阿耨多羅三藐三菩提記」れば、「我願既満」「衆望亦足」のである。

だから前述のように「拈松枝」の授記があり、「拈優曇華」の、「拈瞬目」の、「拈破顔」の、「靸鞋」を授ける授記があるのであって、これは思量分別のよく解するところではない。「我身是也」「汝身是也」というほどの授記である。

この道理において、過去・現在・未来を授記する。授記の中での過去・現在・未来であるから、自己の授記と成り、他人の授記と成るのである。最後の文は前述の「及轉次は我今なるべし、過現当の自他にかかるべからず」を承け、次の弥勒の受記の課題を導き出す。

そこで(8)の『維摩經』の長文の引用文の後に、次のように

提示する。

維摩詰の道取するところ、如來これを不^是といはず。しかるに、弥勒の得受記、すでに決定せり。かるがゆゑに、一切衆生の得受記、おなじく決定すべし。衆生の受記あらずば、弥勒の受記あるべからず。すでに一切衆生、即菩提相なり。菩提の、菩提の授記をうるなり。受記は今日の命なり。しかあれば、一切衆生は弥勒と同發心するゆゑに、同受記なり、同成道なるべし。ただし維摩道の於正位中、亦無受記は、正位即授記をしらざるがごとし、正位即菩提といはざるがごとし。また過去生已滅、未來生未至、現在生無住とらいふ。過去かならずしも已滅にあらず、未來かならずしも未至にあらず、現在かならずしも無住にあらず。無住・未至・已滅等を過未現と学すといふとも、未至のすなはち過現未なる道理、かならず道取すべし。しかあれば、生滅ともに得記する道理あるべし、生滅ともに得菩提の道理あるなり。一切衆生の授記をうるとき、弥勒も授記をうるなり。しばらくなんぢ維摩にとふ、弥勒は衆生と同なりや、異なりや。試道看。すでに若弥勤得記せば、一切衆生も得記せんといふ。弥勤衆生にあらずといはば、衆生は衆生にあらず、弥勤も弥勤にあらざるべし。いかん。正当恁麼時、また維摩も維摩にあらざるべし。維摩にあらずば、この道得用不著ならん。

しかあればいふべし、授記の一切衆生をあらしむるとき、一切衆生および弥勒はあるなり。授記よく一切をあらしむべし。

維摩が弥勒についていう語を、如來は否定しないから、維摩の主張は正しいと見るべきである。すなわち、弥勒の得

受記の事実は決定しており、したがつて一切衆生の得受記も確定している。衆生の受記がなければ、弥勒の受記もないわけである。すでに「一切衆生、即菩提相」という。菩提の衆生が、菩提の授記を得るのである。正しく「受記は今日の命なり」というべきである。このように、一切衆生は弥勤と同じく発心し、同じく受記し、同じく成道するのである。

しかし、維摩がいう「於正位中、亦無受記」の語は、正位が受記することを知らず、正位が菩提であるとはいっていいようである。また維摩は「過去生已滅」「未來生未至」「現在生無住」というが、過去はかならずしも已に滅したものではなく、未來はかならずしも未だ至らざるものではない。無住・未至・已滅等の義によつて、過去・未來・現在の観念を規定しているが、未至に過・現・未があり、已滅に過・現・未がある道理をかならず知るべきである。このような場面ではじめて生・滅がともに得記し、生・滅ともに得菩提する道理が知られよう。一切衆生が授記を得るとき、弥勤も授記を得るというのはこの意である。

この一段を『御聞書』は、

凡維摩詰弥勤ノ授記ヲ疑ニ似タリ（略）但弥勤ノ授記決定シテ、疑所ニアラス、サラハ又維摩ノ僻見カト覺タリ、不可得ノ義ヲ云モ無生ノ義ヲ談スルモ、小乘権門ノ詞ニヲナシ、シカアレハ維摩

ヲサクヘキニ、如來コレヲ不是ト云ハストアレハ、維摩ノ詞ヲ不可非也（略）維摩詞疑ニ似タレトモ、カレモ受記ヲトキ、コレモ受記ヲトク（略）維摩ノ詞モ、道得ノ一句ナルヘシ、

と記し、これを承けて『御抄』は、

維摩ノ詞御釈ニ被非タルヤウナレトモ、已此詞ヲ被引出、今ハ如來ハ不是トイハストアリ、不可弃置（略）此詞不可嫌也、

と、同様に註記している。最終的にはそういうことになるのであろうか。『授記』の文勢からは、やはり維摩の力量を点検していると見るべきであろう。『御聞書』も『御抄』も、会通がすぎると感ぜられる。

君よ。しばらく、維摩に訊ねてみるがよい。「弥勒と衆生とは同じであらうか。それとも異なるのであらうか。ともかくあなた（維摩）の見解を伺いたい。あなたは『弥勒が得記するなら、一切衆生も得記する』といつていた。もしも弥勒は衆生とは異なるというなら、もはや衆生は衆生ではあります、弥勒も弥勒ではありえないのではないか。正にその時は、維摩も維摩ではありえないというべきである。さて、維摩こそこの間に応えるべきであるが、果してどうか」と。

『御抄』は「贊汝維摩ニ問トハ、例ノ開山御詞ナリ」と註する。

このような意味で、授記が一切衆生をあらしめるときに、一切衆生も弥勒もあるのだ、というべきであり、授記はよく

一切をあらしめるものというべきである。

以上で、『授記』の教説内容の全体を概観した。仮りに前述の(8)類の引用文の段落ごとに、その大意を示すと、ほぼ次のような要旨になる。

(序) 授記は自己を現成し、現成の自己は授記に外ならない。仏祖が相承してきたのは、この授記であった。

(1) 八種の授記があるように、授記は自己の覚知を超え、諸仏の本行としてあり、一塵一法も授記でないものはない。

(2) 雪峰と玄沙の事跡も授記である。今仏の授記の中に、過去仏の授記が現われる。靈山の授記は、雪峰の、玄沙の授記として、その真実を現わす。

(3) 雪峰と玄沙によつて、授記は「現成する公案」となつた。諸仏が諸仏から授記を得ることが知られる。

(4) 授記が、相い継いで転次するようすは、仏祖が面々に相見することである。

(5) かくして、授記は我、今の身心に徧參している。

(6) すべてのものに授記が与えられており、すべては仏の眷属である。

(7) 授記は無量であるが、必ず一句一偈として現われ、一念隨喜として現われる。

(8) 菩薩の授記と、衆生の授記とは同一のものである。授記は一切をあらしめる「今日の命」である。
(未完)